

昔風の恋歌

アナキズムについて――

多くのアナキスト哲学者は自由へのあこがれからはじまる。自由が純粹哲學的概念であつたり道德的命令であるかぎり、わたしはうごかされない――わたしは抽象的にかんがえることができない。しかししたいのばあいアナキストのいう自由とは切実な動物的さけびか、または「フイデリオ」の囚人たちの賛美歌のような宗教的ながいなのだ。彼らは自分自身がとらえられていると感じる、それはものごとの性質または神により実存的にとらえられているとか、あまりにも多くの経済的どれい制度を見たり経験したためであつたり、彼ら自身が自由をうばわれていたり、帝国主義者により内部まで植民地化されているとかだ。人間になるために彼らは制限をふりはらわなくてはならない。

だいたいにおいて、わたし自身にとってわたしの経験は十分にひろいので、わたしは自由をあこがれることもないし、「意識を拡大」しようなどともおもわない。しかし、ソルジェニツェンのように、文学上の検閲にさらされるとしたら、わたしはべつの感じかたをするだろう。わたしのいつもの腹立ちはわたしがとらわれているということではなくて、わたしが亡命者であるとか、ま

ちがった星のうえに生れてきたということだし、さいきんはねたきりだということだ。わたしがほんとうにこまっていることは、わたしにとって世界が非實際的だということ、それはわたしのよろかさとよわさによって、さらに非實際的にされているということもわかっている。

たしかに、わたしののどをつまらせるような怒りも、ひとなみに、アル。そしてソレラがなくなればいいとおもう。人間性と世界の美に対する侮辱がつねにわたしをおこらせる。うそとか、あげあしとり、低俗さのムードがとつぜんわたしに吐き気をおこさせる。いまの権力者は大人物の意味をしらず、しばしば彼らはたんにおせっかいであつたり、いじわるであつたりすることしかできない。マラテスタがいったように、あなたがただ自分のやりたいことをしようとすると、やつらがじゃまして、その結果おこつたあらそいについてはアナタがわるいからだ、ということになる。最悪なことには、権力による地球破壊行為があきらかにするよう、やつらは気がくるっている。そして古代の悲劇や歴史をよむと、ごうまんな男がいかに神をおろそかにし、そのため自分

ポール・グッドマン

片桐 ユズル・訳

自身だけでなく、関係あるものたちすべてに破壊をもたらすことになったか書いてあるが、そのようにわたしはときどき迷信的にこわくなるのだ、われわれの政治家とおなじ種族に属し、彼らとおなじ土地をあるくのが。

だが、ちがう。ひとは気がいいになったり、おろかになったり、ごうまんになったりする権利がある。それはわれわれに特別なものだ。われわれのあやまちは、だれでも集中的権力で武装できることだ。アナキズムだけが唯一のアンゼンな政策だ。

みんながもっているまちがった観念は、アナキストは「人間性は善である」ことを信じるから、人間の自治を信じることができるといふのだ。

実際は、われわれは悲観的な見方をしがちで、ひとは信用できない、だから権力の集中をさけようというのだ。権力者たちは特におろかなのだらう。というのは彼らは有限な具体的な経験とのふれあいがなく、そのかわりに他人の自発性に干渉したりして、ひとをおろかにしたり不安にさせたりする。かんがえてもごらん、毛沢東や金日成のように神格化されることを、それがひとの性格にどんな影響をあたえるか。またはかんがえられないことについて、たとえばペンタゴンのおえらがたのように、常習的にかんがえつづけたら？

わたしにとって、アナキズムの主な原理は自由でなくて自律だ。おもいつき、わたし流のしかたでそれをやったり、具体的な物をつかう芸術家であるような、そういう経験がわたしはすきだから、わたしは外の権威から命令されることはまんがならない。外の権威は問題や利用可能な手段について具体的に知らないくせに。

だいたいにおいて、権威の天くだりの干渉は、それが国家であれ、集団であれ、民主主義であれ、法人的官僚組織であれ、刑務所看守であれ、学部長であれ、あらかじめきめられたカリキュラムであれ、中央での計画であれ、それさえしなければ、行動はもっと上品で、力づく、識別力のあるものだ。かれらの天くだりの命令は、ある種の緊急のときには必要であるかもしれないが、生命力の犠牲においてなのだ。これは社会心理学における経験的命題であって、多くの証拠はこれを支持するものだ。わたしはおもう一般的に、あるしごとをするのに権力をつかうことは、かなり短期の見とおしにおいても非能率的である。外的な力は内的な力に力をさまたげる。アリストテレスがいったように「たましいはみずからうごくものだ」。

「自由と尊厳」についての彼の最近の本でB・スキナーがいうには、こういうことは防衛的な偏見であって、ひとびとに道具的条件づけをほどこし幸福と調和というひとびと自身のがぞんである目標へとみちびこうとするのをじゃましていく。(ペンタムの実利主義の素朴なくりかえしを今日よむというのはおかしいものだ。)彼はたいせつなことがわかっていない。道具的条件づけに対する反対はそれが自由をおかすということではなくて、その結果の行動が気品が無く低級であり、また安定したものではない。それは第二の天性として吸収同化されたものではないということだ。彼は動物の行動がとにかく訓練者の目標にしたがって形づくられるという事実によってあまりにも強い印象をうけたものだから、彼はそういう行動と、自然の状態における動物の自発的または

受動的、創造的、柔軟な、成長しつつある行動とを、くらべてみなかった。さらについてながら、尊厳は彼がかんがえるように特に人間的偏見ではなくて、どんな動物にもふつうにあるもので、有機体としての一貫性とか、自分の空間がおびやかされたときにははげしく怒って守るものだ。

自由へのあこがれはたしかに政治的変革の動機としては自律よりはつよいものだ。(しかし、それが同様にしぶといかどうか、わたしはうたがう。自分流に自分のしごとをしているひとは、それをつづけるためには、たいてい、反抗以外の方法をみつけ、そのなかには干渉に対する多くの消極的抵抗がふくまれる。)アナキスト革命をするために、バクーニンが、初期のころ、もとめたものは、まさに社会ののけ者、不良、売春婦、囚人、土地をうばわれた農民、ルンペン・プロレタリアート、失うものはなにもない者、くさりさえない者、しかし、しいたげられていると感じる者たちにならうとした。工業化と都市化のぞとする最中にはこうした種類のひとたちも十分にいた。しかし、とうぜんのことながら、なにも持たない者を組織し長期の努力のために連帯させることはむづかしい。さらに彼らはファシストによってかんたんに誘惑され、鉄砲、報復、一瞬間の権力の幻影をもたされてしまふ。

自由にあこがれるしいたげられたひとのあわれさは、彼らが自由になったときに、どうしていいかわからずにいることだ。自律的でなかったために、どうしていいかわからず、それがわかるときにはすでに手おくれなのだ。あたらしい管理者があつていきつぎ、彼らは情ぶかくあつたりなかったり、革命にそまってい

るかもしれないし、いないかもしれないが、とにかく彼らはかんたんにはしりぞかない。しいたげられたものたちは「新しい社会」からあまりに多くのものを期待するが、がんこにじぶんのしごとをおかされまいと用心するようなひとたちではない。わたしにかんがえられる唯一の成功した解放運動はアメリカ独立戦争で、それは主として職人、百姓、商人、知的職業人たちによってたたかれた。彼らはまもらねばならない利害関係があり、干渉をなくしたかったのだ。そしてのちに約三十年にわたって繁栄の半アナキ―状態をたのしんだ―だれも新政府のことなど心配しなかった。彼らは五千キロの海によってまもられていた。スペイン戦争中のカタロニア革命も、おなじ理由により、うまくいくはずだったが、ファシストとコミニストにやられた。

アナキ―には能力と自信、世界は自分のタメにあるという感じが必要だ。それはさくしゅされ、しいたげられ、植民地化されたものたちのなかでけさかえない。というわけで、不幸にも、それには革命的変革への強力な衝動に欠けている。しかしヨーロッパやアメリカの繁栄でリベラルな社会には次のような希望的可能性もある。中流階級、若者、職人、専門家のなかのかなり自律的なひとびとは現在の制度のなかではつづけることができないともわざるをえなくなっている。彼らは正直な役に立つしごとというものをできなくされ、専門技術を高潔につかうこともできなくされている。芸術と科学は墮落している。つましくやってきた企業も生きのこるためには身分不相応に拡大しなくてはならぬ。若者は天職をみつめることができない。子どもをそだてるのはむづかしい。才能は資格証書によってしめころされ、自然環境は破

壊され、健康はおびやかされ、共同体での生活は精神異常だし、となり近所は醜く危険で、公共事業はやくにたらず、税金は戦争、教育、政治家のために浪費されている。だから彼らは変革をして、おかされることから自由の領域をひろげるようになるかもしれない。そのような変革はつぎはぎ的で劇的ではないだろう、しかしそれが基本的なことだ。というのは現在の制度をぜんぶひっくりかえすことはできないことだし、しかもオーガニゼーションの傾向は全体として破滅にむかっている。わたしがすきなマルクシズム用語は「国家の消滅」だが、それはあとでなく、いますぐはじめなくてはならない。そして目標は「新しい社会」ではなくて、がまんして、生きていける社会だ。

(WIN Feb 15 1972)

本稿は、ポール・グッドマンの死を追悼した同名の小冊子『昔風の恋歌』(一九七二年)を訳者の了解を得て、再録したものである。

編集部

◇ポール・グッドマンの邦訳著作◇

『コミュニティ』——理想社会への思索と方法 兄パーシバル・グッドマンと共著(榎文彦・松本洋訳)彰国社

『不条理に育つ』——管理社会の青年たち (片桐ユズル訳) 平凡社

『新しい宗教改革』(片桐ユズル訳)紀伊国屋書店

『不条理に育つ』1「しごと」片桐ユズル訳(鶴見俊輔編「大衆の時代」平凡社『現代人の思想』7)

『不条理に育つ』4「能力」片桐ユズル訳(秋山清編『権力の拒絶』風媒社)

『人民か人員か』1「一応もつともな反論」片桐ユズル訳(佐藤昇編『社会主義の新展開』平凡社『現代人の思想』18)

『アメリカにおける道徳の曖昧性』渡辺武達訳(鶴見俊輔編『アメリカの革命』筑摩書房『現代革命の思想』5)

『ことば・そして文学』——生きた言葉を考えよう (中條修訳) 紀伊国屋書店

『軍産クラブでの漫談』——一九七〇年代の経済環境にむけての研究と開発 (中尾ハジメ訳)『現代思想』一九七三年九月号

◇ポール・グッドマンに関する文献◇

『グッドマン論議』 片桐ユズル・中尾ハジメ

『ポール・グッドマンを偲ぶ』 コーリン・ウォード(『フリーダム』)大沢正道訳『黒の手帖』十五号

『アナキズムと現代革命』——ポール・グッドマンの思想的総括 大沢正道『現代思想』一九七三年九月号

『ユートピアを求めて』——ポール・グッドマンの空想社会学 シオドア・ローザック(稲見芳勝・風間禎三郎訳)『対抗文化の思想』ダイヤモンド社

『アナキー・イン・アクション』 コーリン・ウォード(ロン

ドン、ジョージ・アレン&アンウィンLTD、一九七三)

WORKS BY PAUL GOODMAN

- Stop-Light and Other Noh Plays (Saugatuck, Conn.: The 5 x 8 Press, 1942).
- The Grand Piano, Or, The Almanac of Alienation (The Colt Press, 1942).
- In Five Young American Poets, Second Series (New York: New Directions, 1945).
- State of Nature (1946).
- The Facts of Life (1946).
- Art and Social Nature (New York: Vinco, 1946).
- Drawing the Line (New York: Random House, 1946).
- Communitas: Way of Livelihood and Means of Life (with Percival Goodman) (New York: Random House, 1947; Vintage Books, 1960).
- Kafka's Prayer (1947).
- The Break-Up of Our Camp, and Other Stories (New York: New Directions, 1950).
- Gestalt Therapy (with F.S. Perls and Ralph Hefferline) (New York: The Julian Press, 1951; also a Delta Book).
- Parents's Day (Saugatuck, Conn.: The 5 x 8 Press, 1951).
- The Structure of Literature (University of Chicago Press, 1954).
- The Empire City (New York: Bobbs-Merrill, 1959; The Macmillan Company, 1964).
- Our Visit to Niagara (Horizon Press).
- Growing Up Absurd (New York: Random House, 1960; Vintage Books, 1962).
- The Lordly Hudson and Other Poems (New York: The Macmillan Company, 1962).
- Utopian Essays & Practical Proposals (New York: Vintage Books, 1962).
- The Community of Scholars (New York: Random House, 1962).
- The Society I Live In Is Mine

Making Do (New York: The Macmillan Company, 1963; A Signet Book, 1964).

Compulsory Mis-Education (Forizon Press, 1963).

Compulsory Mis-Education and The Community of Scholars (in one volume, A Vintage Book).

Democratic-Republicans of Massachusetts: Politics in a young Republic (Harvard University Press, 1964).

Young Disciple, Faustina, Jonah: Three Plays (New York Random House, 1965).

People or Personnel: Decentralizing and the Mixed System (New York: Random House, 1965).

Seeds of Liberation (editor) (New York: Braziller, 1965).

Like a Conquered Province: The Moral Ambiguity of America (New York: Random house, 1967).

Hawkweed: Poems (New York: Vintage Books, 1967).

Essays in American Colonial History (editor) (Books for Libraries, 1967).

Federalists Vs. the Jeffersonian Republicans (Holt, Rinehart & Winston, 1967).

North Percy (Los Angeles: Black Sparrow, 1968).

Adam & His Works: Collected Stories (New York: Vintage Books, 1968).

People or Personnel & Like a Conquered Province (in one volume from Vintage Books, 1969).

Five Years: Thoughts During a Useless Time (New York: Vintage Books, 1969).

Open Look (New York: Funk & Wagnalls, 1969).

Homespun of Catmeal Gray (New York: Vintage, 1970).

Tragedy & Comedy (Los Angeles: Black Sparrow, 1970).

New Reformation: Notes of a Neolithic Conservative (New York: Vintage Books, 1970).

American Colonial Experience (with F.O. Gatell) (Holt Rinehart & Winston, 1970).

American Constitution (editor) (Wiley, 1970).

Speaking & Language: Defense of Poetry (New York: Random House, 1971).